

# フェミニズム思想の依存批判は何を問題にしているのか

東京大学 齋藤圭介

## 1 目的

フェミニズム思想において、〈ケア〉という論点が重要な意味を帯びてきている。1つには発達心理学者のC. ギリガンによる〈ケアの倫理〉に端を発する系譜がある。〈ケアの倫理〉は初発の問題関心であった発達心理学やそこから展開したフェミニズム思想の文脈を離れ、現在はより広い文脈である政治思想や正義論の文脈において活発に議論されている。そのさい、〈ケアの倫理〉が〈正義の倫理〉とどのような関係にあるのかが争点になった。論者により、両者を排他的な関係と考えるか、統合が可能と考えるか、あるいは編み合わせが可能と考えるかは異なる。

〈正義の倫理〉の議論で念頭に置かれているのは、J. ロールズの『正義論』である。一方、ケアや依存を主題とするフェミニズムの論者のうち、依存批判 (dependency critique) という視座からロールズへの批判を明確にした論者がE. キティ (1996, 1999=2010) である。

本稿は、依存批判の内実を明らかにし、その妥当性を検討する。そのさい、キティによるロールズ批判を直接の対象とするのではなく、〈キティによるロールズ批判〉を対象に検討を行った論者であるAsha Bhandary (アーシャ・バンダリ) の議論を中心に検討する。そうすることで、英語圏のフェミニズム思想のなかでキティの依存批判がどのように評価されているのかもあわせて検討を行う。

## 2 方法

J. ロールズの『正義論』へのフェミニズム思想からの批判の1つである依存批判 (dependency critique) の妥当性や可能性の検討を、バンダリは2010, 2011年の論文で行っている。

このバンダリの検討を評価するためには、まずロールズの主張と、それへのフェミニストの多様な論者の応答の違いについて見取り図の提示を行うことが有益だろう。そのうえで、本研究の対象であるキティの依存批判を対象にしたバンダリの主張を検討する必要がある。

## 3 結果と考察

〈ケアの倫理〉の第2世代は、〈ケアの倫理〉を行政政策などの公的領域で展開していこうという志向があるといわれる (Hankivski 2004)。私的領域の問題として論じられてきた〈ケアの倫理〉が、いかなる意味で公的領域での倫理になりうるのかを、バンダリの主張を検討することを通して展望の道筋を示したい。

## 文献

- Bhandary, A. L., 2010, "Dependency in Justice: Can Rawlsian Liberalism Accommodate Kittay's Dependency Critique?" *Hypatia*, 25(1): 140-56.
- , 2011, "Liberalism and Dependency Care," Doctoral Dissertations University of Connecticut.
- Hankivski, O., 2004, *Social Policy and the Ethic of Care*, UBS Press.
- Kittay, E. F., 1996, "Human Dependency and Rawlsian Equality," D. T. Meyers, *Rethinking the Self*, Colorado: Westview Press.
- , 1999, *Love's Labor: Essays on Women, Equality, and Dependency*, Routledge. (=2010, 岡野八代・牟田和恵監訳『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』白澤社.)